

ふじのくにの地域外交

将来に向け戦略的な交流を展開することで、国際的な存在感を高めていく静岡県の地域外交。
百済王朝や朝鮮通信使など、歴史の中で絆を育んできた韓国との交流について紹介する。

韓国編

1300余年の友情が息づく静岡と韓国の新時代

静岡県と韓国との歴史のつながり

静岡県と韓国とのつながりは7世紀までさかのぼることができる。『日本書紀』によると、当時、現在の韓国忠清南道(チュンチョンナムド)に最後の都を構えていた百済王朝が、660年の滅亡後、再興をかけて戦った663年の「白村江(はくすきのえ)の戦い」に、静岡から1万人余りの軍勢が援軍に向かったとされている。軍勢を率いた人物として、現在の静岡市清水区を拠点としていた庵原君臣(いおはらのきみおみ)の名があり、現在の静岡市清水区には「庵原」という地名も残る。

江戸時代、李氏朝鮮王朝から幕府に派遣された朝鮮通信使も両者のつながりを示している。国王の親書を携えた通信使がソウルと江戸を往復する際、数多くの足跡を静岡県に残しているからだ。1607年、徳川家康公が大御所として駿府にあった時代、来日した江戸時代第一回目の朝鮮通信使を、駿河湾に船を浮かべて歓待したほか、6月20日には駿府城で面会したとの記録が残っている。朝鮮通信使は江戸時代を通じて興津の清見寺に何度も投宿し、同寺には彼らが揮毫した(書いた)扁額(へんがく)が日本一多く残されている。

そして、時を隔てた21世紀。平成21年の富士山静岡空港へのソウル(仁川)便就航を契機として交流人口が拡大し、静岡と韓国の関係が再び活性化される。同時に、かつて百済王朝の都があり、静岡県と白村江の戦いから歴史的につながりのある忠清南道

た内浦新都市を建設するなど、今後さらなる発展が期待されている地域である。

農水産業やものづくりが盛んであることや、ともに国土の中央部に位置する交通の要衝である上に、首都ソウルまでの距離も静岡・東京間とほぼ同じといった地理的な特長など、静岡県と忠清南道には共通する要素が多い。そうした共通項を背景に、両県道は平成25年に締結した友好協定に基づき、経済、観光、文化、教育、医療、防災等の幅広い分野で、相互にメリットのある地域外交を展開する方針を打ち出している。

日韓関係に一石を投じる静岡県の地域外交

静岡県と忠清南道の両県道は、民間団体間の交流促進や、自治体間における防災分野などを中心に交流を進めている。平成26年2月と9月、県内で文化活動等を行う民間団体が忠清南道を訪問し、現地で同様の活動をする団体と交流を行った。県が忠清南道と連携し、交流にふさわしい団体の紹介や、日程の調整、通訳の手

配など、民間団体をサポートすることで、団体間の交流のきっかけを作り、交流人口の拡大を目指している。

防災分野については、友好協定における交流のひとつとして、平成26年10月と11月、防災に関する視察や意見交換を相互に行っている。

そのほか、平成27年が日韓国交正常化50周年となることを機に、忠清南道との交流にとどまらず、富士山を擁する隣県の山梨県、そして、忠清南道に隣接し、山梨県と姉妹提携を結んでいる忠清北道を含めた日韓4県道による、広域的な地域間交流も目指している。

さらに、かつて朝鮮通信使が日本へ出航した地であり、韓国第二の都市でもある釜山広域市とも関係を深めている。忠清南道と同様に民間団体間の交流支援を行っており、今後は文化面での交流拡大も模索する。

静岡県はこうした交流を進めることで、日韓の友好的な機運の醸成に努めるとともに、富士山静岡空港と仁川国際空港を結ぶ航空路線の利用客増加や、本県を訪問する韓国人観光客の増加を図る構えだ。



忠清南道庁が移転した内浦新都市



平成25年4月、忠清南道との友好協定を締結



山梨での民間外交支援事業の様子



日本を代表する朝鮮通信使遺跡 清見寺

※扁額: 門戸や室内に掛ける横に長い額で、木の板に文字が書かれているか、彫られているもの。